

表 5 出現種一覧（調査地点：A1）

調査日：令和 5 年 7 月 28 日

区分	種名	ケーソン部	遊水室	天端部
海藻類	アオノリ属	●		
	アオサ属	●	●	
底生生物	ヒドロ虫綱	●		●
	イソギンチャク目	●		
	フサコケムシ	●		
	ホソフサコケムシ	●		
	ツノマタコケムシ科			●
	苔虫綱			●
	アカエラミノウミウシ	●		●
	ムラサキイガイ	●	●	
	ミドリイガイ	●		
	マガキ	●	●	
	ウスカラシオツガイ	●	●	
	マダコ	●		●
	トゲアメフラシ			●
	ウミフクロウ			●
	ケヤリムシ科	●		●
	カンザシゴカイ科	●		●
	イワフジツボ	●		
	タテジマフジツボ	●		
	アメリカフジツボ	●		
	サンカクフジツボ	●		
	オオアカフジツボ	●		
	ヨツハモガニ	●		
	イシガニ	●	●	●
	サンショウウニ			●
	キヒトデ	●		●
	マナマコ	●		●
	カタユレイボヤ	●	●	●
	イタボヤ科	●		●
	エボヤ	●	●	●
	シロボヤ	●	●	●
	ウスボヤ科			●
	マンハッタンボヤ			●
	ホヤ綱(単体性)	●		●
	ホヤ綱(群体性)	●	●	
	カサゴ	●		●
	イソギンボ	●		
シマハゼ類	●	●	●	
タテジマイソギンチャク		●		
クロダイ		●		
シマイサキ		●		
マアジ			●	
合計	43 種	32 種	13 種	23 種

注) ●は出現種を示す。

表 6 出現種一覧（調査地点：A2）

調査日：令和 5 年 7 月 28 日

区分	種名	ケーソン部	遊水室	天端部
海藻類	アオノリ属	●		
	アオサ属	●		
底生生物	ヒドロ虫綱	●		●
	イソギンチャク目	●		●
	フサコケムシ	●		
	ホソフサコケムシ	●		
	ツノマタコケムシ科			●
	苔虫綱			●
	ムラサキイガイ	●	●	
	ミドリイガイ	●		
	ウスカラシオツガイ		●	
	マガキ	●	●	
	ウミフクロウ			●
	アカエラミノウミウシ			●
	マダコ			●
	ミズヒキゴカイ科			●
	ケヤリムシ科	●		●
	カンザシゴカイ科	●		●
	イッカククモガニ			●
	イワフジツボ	●		
	タテジマフジツボ	●		
	アメリカフジツボ	●		
	サンカクフジツボ	●		
	チンオウフジツボ	●		
	イシガニ	●	●	●
	キヒトデ	●		●
	マナマコ	●		●
	カタユウレイボヤ	●	●	●
	イタボヤ科	●		●
	エボヤ	●		
	シロボヤ	●	●	●
	ウスボヤ科			●
	マンハッタンボヤ			●
	ホヤ綱(単体性)	●		●
	ホヤ綱(群体性)	●	●	
	ボラ	●	●	
	カサゴ	●		
	クロダイ	●		●
シマハゼ類	●	●	●	
マアジ			●	
シマイサキ			●	
キュウセン			●	
合計	42 種	29 種	9 種	25 種

注) ●は出現種を示す。

【代表的な確認種】

護岸（東）



シロボヤ

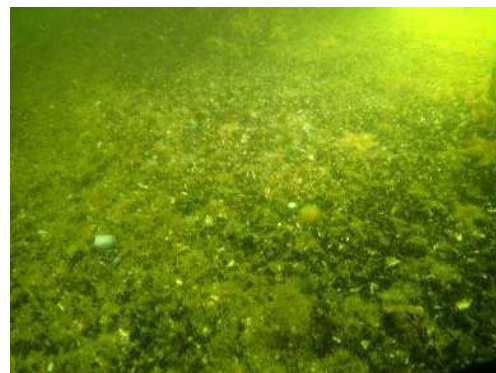


カンザシゴカイ科

護岸（南）



イワフジツボ



ムラサキイガイ

護岸A



マダコ

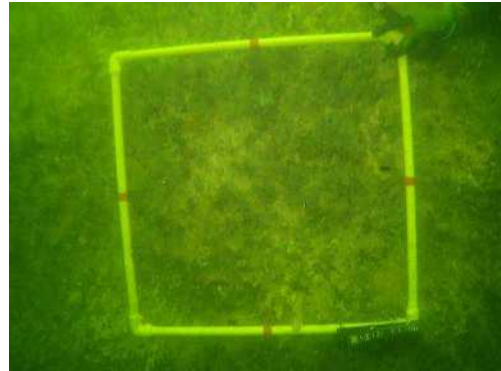


マナマコ

【調査の様子】



潜水目視観察



コドラート調査

生物調査（干潟以外）のレポート④

実施・主催機関	調査場所・地点名	実施日	調査内容
東京都板橋区	石神井川	7月31日	魚類、底生動物

生物調査の結果

団体名	東京都板橋区		
調査地点名	石神井川 ①久保田橋 ②緑橋		
位置座標 (可能であれば)	緯度	①N35.45.26 ② N35.45.20	
	経度	①E139.41.46 ② E139.42.57	
実施年月日	令和5年7月31日(月)		

## 1 調査概要

### ① 調査地点及び調査実施日

河川名	調査地点名	調査実施日	天候	気温 (°C)	水温 (°C)
石神井川	①久保田橋付近	2023/7/31 (月)	晴れ	33.0	25.0
	②緑橋付近	2023/7/31 (月)	晴れ	35.0	29.0

### ② 調査方法

各調査地点において投網、タモ網（手網）及びカゴ網を用いて、魚類、底生動物を採集した。

採集した個体は現地で種の同定、個体の計測、写真撮影を行い、再放流した。現地での同定が困難な個体については、10%ホルマリンで固定して持ち帰り、実体顕微鏡下で同定した。底生動物については、肉眼でみえる個体を採集対象とした。



投網



タモ網



カゴ網

## 2 調査結果

### ① 河川状況

#### (1) 石神井川① 久保田橋付近

河床全面に護床ブロックが設置され、一部には植生ブロックが水制状に設置されている。植生ブロックにより小規模な瀬と淵が形成されている。

カゴ網は久保田橋下流の植生ブロック脇などやや淵状になっている2箇所を設置した。



#### (2) 石神井川② 緑橋付近

河道が蛇行しており、凸側に寄り州が形成されている。寄り州は砂で形成され、植生は前年度より多くなっていた。河道の一部には深みがあり、水草が繁茂する場所もあった。

カゴ網は緑橋の上流のやや淵状になっている箇所と橋下の滞留部に計2箇所設置した。



## ② 魚類調査結果

石神井川の2地点全体では、アブラハヤ、タモロコ、ドジョウなど、4目5科7種の魚類が確認された。

出現種のうち、「環境省 RL2020」に該当する種として、絶滅危惧 II 類に該当するギバチ、ミナミメダカ、準絶滅危惧に該当するドジョウが確認された。

「東京都 RL2020 区部」に該当する種として、絶滅危惧 IA 類に該当するドジョウ、ミナミメダカ、絶滅危惧 II 類に該当するギバチ、ヒガシシマドジョウ、準絶滅危惧に該当するアブラハヤが確認された。

外来種については該当する種は確認されなかった。

.....  
 ○「環境省 RL2020」：環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）2020年

絶滅危惧 II 類（VU）：絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧（NT）：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

○「東京都 RL2020 区部」：東京都レッドリスト（本土部）2020年見直し版

絶滅危惧 IA 類（CR）：ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高いもの

絶滅危惧 II 類（VU）：現在の状態をもたらした圧迫要因が引き続き作用する場合、近い将来「絶滅危惧 I 類」のランクに移行することが確実と考えられるもの

準絶滅危惧（NT）：現時点での絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの

○外来種

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」環境省に指定された種（2023）。

「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」環境省及び農林水産省に指定された種（2016）

## 魚類調査結果

No.	目名	科名	種名	石神井川		合計	環境省 RL2020	東京都 RL2020 見直し 版	外来種	
				①	②					
				久保田 橋付近	緑橋 付近					
1	コイ目	コイ科	アブラハヤ	9	3	12		NT		
2			タモロコ	10	16	26				
3		ドジョウ科	ドジョウ	2	52	54	NT	CR		
4			ヒガシシマドジョウ	6	7	13		VU		
5	ナマズ目	ギギ科	ギバチ	47	2	49	VU	VU		
6	ダツ目	メダカ科	ミナミメダカ		1	1	VU	CR		
7	スズキ目	ハゼ科	ヨシノボリ属		1	1				
	4目	5科	7種	種類数計	5	7	7	3	5	0
				個体数計	74	82	156			

・種名及び配列等は、原則として「河川水辺の国勢調査のための生物リスト 2022」に従った。



地点別魚類捕獲状況

地点	No.	種名	体長(mm)		個体数	備考
			最大	最小		
石神井川	①久保田橋付近	1	アブラハヤ	31	28	9
		2	タモロコ	34	22	10
		3	ドジョウ	110	32	2
		4	ヒガシシマドジョウ	67	37	6
		5	ギバチ	24	15	47
	②緑橋付近	1	アブラハヤ	27	21	3
		2	タモロコ	32	28	16
		3	ドジョウ	116	20	52
		4	ヒガシシマドジョウ	36	25	7
		5	ギバチ	17	16	2
		6	ミナミメダカ	24		1
		7	ヨシノボリ属	37		1



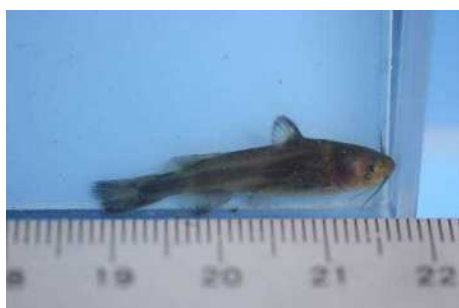
タモロコ



ドジョウ



ヒガシシマドジョウ



ギバチ



ミナミメダカ



ヨシノボリ属



③ 底生動物調査結果

石神井川の2地点全体では、タンスイカイメン科、モノアラガイ属など、7綱16目17科21種の底生動物が確認された。

出現種のうち、「環境省 RL2020」に該当する種は確認されなかった。

「東京都 RL2020 区部」に該当する種として、留意種に該当するモクズガニが確認された。外来種については「特定外来生物」に該当する種は確認されなかったが、「その他の総合対策外来種」に該当するフロリダマミズヨコエビが確認された。

底生動物調査結果

No.	綱名	目名	科名	種名	学名	石神井川		合計	環境省 RL2020	東京都 RL2020 見直し版 区部	外来種	
						① 久保田橋付近	② 緑橋付近					
1	普通海綿綱	ザラカイメン目	タンスイカイメン科	タンスイカイメン科	Spongillidae		*					
2	有棒状体綱	三岐腸目	サンカクアタマズムシ科	アメリカツノウズムシ	<i>Girardia dorotocephala</i>		2	2				
3	腹足綱	汎有肺目	モノアラガイ科	モノアラガイ属	<i>Radix</i> sp.	7	13	20				
4	ミミズ綱	オヨギミミズ目	オヨギミミズ科	オヨギミミズ科	Lumbriculidae	2	2	4				
5		イトミミズ目	ミズミミズ科	エラミミズ	<i>Branchiura sowerbyi</i>	3	1	4				
6				ミズミミズ科	Naididae		1	1				
7		ツリミミズ目	ヒモミミズ科	ヤマトヒモミミズ	<i>Biwadrilus bathybates</i>	1	2	3				
8	ヒル綱	吻蛭目	ヒラタビル科	ハバヒロビル	<i>Alboglossiphonia lata</i>		1	1				
9		吻無蛭目	イシビル科	シマイシビル	<i>Dina lineata</i>	10	9	19				
10	軟甲綱	ヨコエビ目	マミズヨコエビ科	フロリダマミズヨコエビ	<i>Crangonyx floridanus</i>	3	5	8			その他	
11		ワラジムシ目	ミズムシ科 (甲)	ミズムシ (甲)	<i>Asellus hilgendorfi hilgendorfi</i>	9	8	17				
12		エビ目	ヌマエビ科	カワリヌマエビ属	<i>Neocaridina</i> sp.	72	26	98				
13			モクズガニ科	モクズガニ	<i>Eriocheir japonica</i>	1	1	1			留	
14	昆虫綱	トンボ目 (蜻蛉目)	トンボ科	シオカラトンボ	<i>Orithetrum albistylum speciosum</i>		1	1				
15		カメムシ目 (半翅目)	アメンボ科	アメンボ	<i>Aquarius paludum paludum</i>	1	1	2				
16		トビケラ目 (毛翅目)	シマトビケラ科	コガタシマトビケラ	<i>Cheumatopsyche brevilineata</i>		1	1				
17				コガタシマトビケラ属	<i>Cheumatopsyche</i> sp.		1	1				
18				ヒメトビケラ科	ヒメトビケラ属		1	1				
19		ハエ目 (双翅目)	ユスリカ科	ハモンユスリカ属	<i>Polypedilum</i> sp.		1	1				
20				ヒゲユスリカ属	<i>Tanytarsus</i> sp.	1	8	9				
21				ユスリカ亜科	Chironominae		1	1				
						種類数計	11	20	21	0	1	1
						個体数計	110	85	195			

○「環境省 RL2020」：環境省版レッドリスト（絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト）2020年

○「東京都 RL2020 区部」：東京都レッドリスト（本土部）2020年見直し版

留意種（留）：現時点では絶滅の恐れはないと判断されるが、いずれかの理由で留意が必要とされるもの（理由本文を要約）

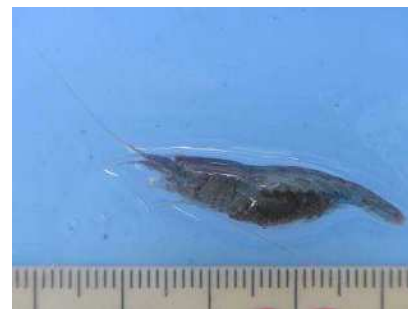
○外来種

「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」環境省に指定された種（2023）。  
「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」環境省及び農林水産省に指定された種（2016）

その他の総合対策外来種（その他）：総合対策外来種のうち、緊急対策外来種、重点対策外来種以外の種。



モクズガニ



カワリヌマエビ属

### 3 調査結果のまとめ

#### 魚類の経年変化について

石神井川久保田橋付近では、平成 20 年以前は 6 種、平成 21 年からはドジョウ、アブラハヤなど 0~6 種と確認種数は少なかったが、本年度の確認種は、アブラハヤ、タモロコ、ドジョウ、ヒガシシマドジョウ、ギバチの 5 種であり、令和 3 年度に比べ、種類数、個体数とも増加している。

特に個体数については、ドジョウ、ギバチが令和 3 年度に続き確認されたが、令和 3 年度に個体数が最も多く確認されたウグイは確認されなかった。また、個体数は 1 個体と少ないものの、令和 2 年度に初めて確認されたタイリクバラタナゴ、グッピーについても確認されなかった。しかしながら、令和 3 年度に確認されなかったアブラハヤ、ヒガシシマドジョウが確認されたほか、平成 30 年以降確認されなかったタモロコが 10 個体確認された。

現地調査時の河川の状況は、昨年よりやや増水していた状況であったが、久保田橋付近の環境が大きく変化した様子は見られないことから、これら出現種の変化については、近年多発するゲリラ豪雨等の急激な増水による影響の可能性が考えられる。

石神井川緑橋付近では、平成 20 年以前は 11 種、平成 21 年からはアブラハヤ、モツゴ、ドジョウ、ギバチなど 1~9 種が確認されている。本年度の確認種は、アブラハヤ、タモロコ、ドジョウ、ヒガシシマドジョウ、ギバチ、ミナミメダカ、ヨシノボリ属の計 7 種であり、令和 3 年度に比べ、種類数は減少したが、個体数は増加している。この地点は、規模は小さいものの寄り州があり、流れの中に水草が繁茂する場所もある。本年度は例年と同様にアブラハヤ、ドジョウ、ヒガシシマドジョウ、ギバチ、ヨシノボリ属が令和 3 年度に続き確認されたが、ウグイ、モツゴは確認されなかった。令和 3 年度に初めて確認されたグッピーについても確認されなかった。しかしながら、令和 2 年以降確認されなかったタモロコ 16 個体と、平成 30 年以降確認されなかったミナミメダカが 1 個体ではあるが再び確認された。

生息する種類や個体数の変動の要因としては、石神井川は両地点とも河川構造が概ね単純な 3 面張り護岸となっており、近年多発するゲリラ豪雨等の急激な増水により河道が洗われてしまうため、大半の魚類が、下流に押し流されたり、逆に上流から流されて来たりすることによるものと考えられる。したがって、今後も魚類相の変化や個体数の変動について継続して把握することが必要であると考えられる。

一般的には、久保田橋付近に設置されている植生ブロックや大小さまざまな寄り州、またはブロックのすき間、水草などは、増水などからの逃げ場となりえる環境と考えられており、現状より増加することが望まれる。

生物調査（干潟以外）のレポート⑤

実施・主催機関	調査場所・地点名	実施日	調査内容
国土交通省 関東地方整備局 東京空港整備事務所	東京湾内	①8月2日 8月29日～8月31日 8月4日 ②8月7日	①浅場に生息する水生生物 ②海底に生息する底生生物

生物調査の結果

団体名	国土交通省関東地方整備局東京空港整備事務所	
調査地点名	① Stn.1 ② Stn.2 ③ Stn.3 ④ Stn.4 ⑤ St.A ⑥ St.B ⑦ St.C ⑧ St.D ⑨ Stn.⑨-2'	
位置座標 (可能であれば)	緯度	①N35°33.978'、②N35°34.011'、③N35°33.908'、 ④N35°33.941' ⑤N35°32.162' ⑥N35°32.159' ⑦N35°32.155' ⑧N35°32.181' ⑨N35°32.037'
	経度	①E139°47.455'、②E139°47.524'、③E139°47.505'、 ④E139°47.574' ⑤E139°48.341' ⑥N35°48.334' ⑦N35°48.326' ⑧N35°48.318' ⑨E139°47.158'
実施年月日	①～④：令和5年8月2日 ⑤～⑧：令和5年8月29日～8月31日 ⑥：令和5年8月4日	

【対象生物】

浅場に生息する水生生物

【調査結果概要】

主な確認種の写真



ウミエラ



ツメタガイ



頭足綱 (イカ類) の卵塊



マハゼ



ウミサボテン



イシガニ



ツバサゴカイ科棲管



アラムシロ

①～④ Stn.1～Stn.4 では、以下の種が認められました。  
(底生動物)

調査期日：令和 5 年 8 月 2 日  
調査方法：エックマンバージ型採泥器による  
3 回採泥  
単 位：m<sup>2</sup>あたりの個体数および湿重量(g)

番号	門	種名	調査地点		Stn. 1		Stn. 2		Stn. 3		Stn. 4	
			個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量		
1	紐形動物	異紐虫目					15	1.48				
2		紐形動物門	474	0.59	444	0.74	15	+	252	0.59		
3	軟体動物	アラムシロ					15	8.00	15	9.19		
4		サルボウ							15	4.59		
5		ホトキスカイ	2,844	42.07	563	4.59	622	0.44				
6		ホンビノスカイ					15	5.33				
7		アサリ	104	49.78	59	20.89	104	45.33	59	16.44		
8		ウスカラシオツカイ	15	0.44	15	0.15	104	4.89				
9		シズクカイ					15	0.15	15	0.30		
10		チヨノハナカイ	44	1.78								
11	環形動物	<i>Harmothoe</i> sp.							15	0.15		
12		<i>Eumida</i> sp.	119	+	15	+	133	+				
13		<i>Phyllodoce</i> sp.					119	0.15				
14		アルハチロリ	44	2.37								
15		<i>Glycera</i> sp.					15	0.30				
16		<i>Glycinde</i> sp.	15	+								
17		モグロトヒメ	133	+	15	+	15	+	15	+		
18		オトヒメコカイ科							30	+		
19		ニホンカキゴカイ									15	+
20		ハナカキゴカイ	1,111	1.48	2,237	1.48	1,748	1.33	2,563	3.11		
21		アサカゴカイ	15	+	15	+	15	0.15				
22		オウキゴカイ	89	1.93	30	0.44						
23		クサクサカイ科					15	+			30	+
24		ミナミシロカネコカイ							15	+		
25		カタマカリキボシイソメ	15	0.15					30	0.15	15	+
26		<i>Schistomeringos</i> sp.	119	+								
27		ケンサキスピオ	207	0.74	681	1.78	30	0.15	15	0.15		
28		<i>Dipolydora</i> sp.							548	0.30	15	+
29		シロハネエラスピオ	1,052	7.26	1,481	8.59	993	8.59	2,000	16.74		
30		<i>Polydora</i> sp.	133	+								
31		ミツハネスピオ	444	0.30	711	0.74	104	0.15				
32		エリタラスピオ	830	0.15	119	+	237	+	252	+		
33		イトエラスピオ	1,778	0.30	1,896	0.59	1,659	0.59	4,993	2.37		
34		<i>Scolelepis</i> sp.	800	1.48	607	0.30					119	+
35		エラナシスピオ					15	+				
36		<i>Magelona</i> sp.							119	+		
37		ツバサコカイ属									15	+
38		<i>Chaetozone</i> sp.					44	0.15				
39		ミスヒキゴカイ	89	9.19	148	25.78	178	24.59	30	4.00		
40		<i>Tharyx</i> sp.	3,363	4.44	2,163	2.07	1,467	1.48	74	0.15		
41		<i>Mediomastus</i> sp.	3,926	3.56	2,193	1.19	2,133	1.19	5,630	2.37		
42		チマキゴカイ					30	1.19				
43		<i>Chone</i> sp.	415	0.74	815	2.52	296	0.74	430	0.74		
44	筈虫動物	<i>Phoronis</i> sp.					296	0.89	15	+	15	+
		種類数			25		30		27		19	
		合計	18,178	128.75	14,801	89.49	10,670	104.30	16,537	46.66		

注：「+」がある場合、個体数欄は群体等の出現を、湿重量欄は0.01g未満を示す。

(魚介類)

調査期日：令和5年8月2日  
調査方法：潜水目視観察

No.	界	門	綱	種名	8月	
					L1 Stn1-Stn.2測線	L2 Stn3-Stn.4測線
1	動物	海綿動物	—	海綿動物門	●	●
2	動物	刺胞動物	ヒドロ虫	ヒドロ虫綱	●	●
3			花虫	ウミサボテン	●	●
4				ウミエラ目	●	●
5				イソギンチャク目	●	●
6			軟体動物	腹足	アラムシロ	●
7		頭足		頭足綱(卵)	●	●
8		二枚貝		イタボガキ科	●	●
9		環形動物	ゴカイ	ツバサゴカイ科(棲管)	●	●
10				ミズヒキゴカイ科	●	●
11				カンザシゴカイ科	●	●
12		節足動物	軟甲	イシガニ	●	●
13		苔虫動物	—	苔虫動物門	●	●
14	脊椎動物	硬骨魚	マゴチ	●	●	
15			クロダイ	●		
16			マハゼ	●	●	
17			アカオビシマハゼ	●	●	
18			カワハギ	●		
確認種数					18種	16種

⑤ St.A～St.D では、以下の種が認められました。

地点			St. A		St. B		St. C		St. E	
分類			ボサ		ボサ		ボサ		ボサ	
魚類	番号	種名	個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量
	1	出現なし								
	合計		0	0.00	0	0.00	0	0.00	0	0.00
	種類数		0		0		0		0	
魚類以外	番号	種名	個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量	個体数	湿重量
	1	ムギガイ					1	0.03		
	2	<i>Harmothoe</i> sp.					1	+		
	3	ホトシゴカイ科	1	+	1	+				
	4	ツノウミゼミ			2	0.03	8	0.07		
	5	<i>Ophiactis</i> sp.			1	0.01	3	0.02	1	+
	合計		1	+	4	0.04	13	0.12	1	+
	種類数		1		3		4		1	

注：湿重量の+は0.01g未満を示す。

⑥ St.⑨-2'では、以下の種が認められました。

調査期日：令和5年8月4日  
 調査方法：エクマンバージ型採泥器による3回採泥  
 単 位：m<sup>2</sup>あたりの個体数および湿重量(g)

番号	門	種名	調査地点	
			個体数	湿重量
1	紐形動物	紐形動物門	637	0.74
2	軟体動物	アラムシロ	30	20.89
3		ホトシゴカイ	15	3.41
4		アサリ	267	11.11
5		マテガイ	2,978	28.59
6		シオフキ	89	3.41
7		環形動物	<i>Eteone</i> sp.	59
8		ハナオカギコカイ	15	+
9		ヤマトスピオ	519	0.15
10		イトエラスピオ	207	0.15
11		<i>Rhynchospio</i> sp.	356	0.15
12		<i>Spio</i> sp.	44	0.15
13		<i>Capitella</i> sp.	237	+
14		<i>Mediomastus</i> sp.	178	0.15
15		ツツオフェリア	2,341	3.41
種類数			15	
合計			7,972	72.46

注：「+」がある場合、個体数欄は群体等の出現を、湿重量欄は0.01g未満を示す。



生物調査の結果

団体名	国土交通省関東地方整備局東京空港整備事務所	
調査地点名	St.5、St.10、St.12、St.15、St.18、St.①	
位置座標 (可能であれば)	緯度	St. 5 35°33'37.2"、St.10 35°32'10.2" St.12 35°31'29.4"、St.15 35°31'18.0" St.18 35°31'04.2"、St.① 35°31'42.0"
	経度	St. 5 139°48'11.4"、St.10 139°48'39.0" St.12 139°48'03.0"、St.15 139°48'21.0" St.18 139°48'43.8"、St.① 139°47'30.0"
実施年月日	令和5年8月7日	

【対象生物】

海底に生息する底生生物

【調査結果】

出現種数は2～23種類の範囲であり、St.5、St.15、St.18で最も少なく、St.①で最も多かった。

出現個体数は27～9,660個体/m<sup>2</sup>の範囲であり、St.15で最も少なく、St.①で最も多かった。

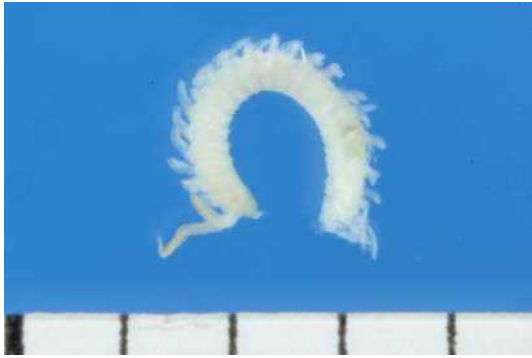
出現種の湿重量は0.01g未満～50.1g/m<sup>2</sup>の範囲で、St.12、St.15およびSt.18で最も少なく、St.①で最も多かった。

主な出現種は環形動物門のヒゲスピオ、シノブハネエラスピオ、*Pseudopolydora* sp.、イトエラスピオ、軟体動物のアサリ、節足動物のミツオビクマであった。

表 底生生物の調査結果概要

項目	地点	事業実施区域				沖合	多摩川河口域
		空港北東側 St. 5	St. 10	St. 12	St. 15	St. 18	St. ①
種数 (種/m <sup>2</sup> )	環形動物門	2	3	5	2	2	13
	軟体動物門						6
	節足動物門						3
	その他						1
	合計	2	3	5	2	2	23
個体数 (個体/m <sup>2</sup> )	環形動物門	727	3,399	67	27	33	7,361
	軟体動物門						573
	節足動物門						1,573
	その他						153
	合計	727	3,399	67	27	33	9,660
湿重量 (g/m <sup>2</sup> )	環形動物門	0.4	3.1	+	+	+	5.1
	軟体動物門						43.9
	節足動物門						0.9
	その他						0.2
	合計	0.4	3.1	+	+	+	50.1
個体数による優占種上位5種 (個体/m <sup>2</sup> (%)) ※8個体以上のみ記載	シノブハネエラスピオ	シノブハネエラスピオ	シノブハネエラスピオ	ヒゲスピオ	ハナカキゴカイ	ハナカキゴカイ	ヒゲスピオ
	667 (91.7)	1,993 (58.6)	27 (40.3)	20 (74.1)	20 (60.6)	3,227 (33.4)	
	ハナカキゴカイ	イトエラスピオ	ハナカキゴカイ		イトエラスピオ	<i>Pseudopolydora</i> sp.	
	60 (8.3)	1,173 (34.5)	13 (19.4)		13 (39.4)	2,520 (26.1)	
		ハナカキゴカイ	<i>Pseudopolydora</i> sp.				ミツオビクマ
	233 (6.9)	13 (19.4)				1,507 (15.6)	
						<i>Armandia</i> sp.	
						760 (7.9)	
						アサリ	
						313 (3.2)	
備考	空白は、出現種(該当種)がないことを示す。 湿重量の「+」は、0.01g/m <sup>2</sup> 未満を示す。						

主な出現種を以下の写真に示す。



環形動物門：ヒゲスピオ



環形動物門：シノブハネエラスピオ



環形動物門：*Pseudopolydora* sp.



環形動物門：イトエラスピオ



軟体動物門：アサリ



節足動物門：ミツオビクーマ

※写真中の1メモリは、1mmを示す。

### 【調査の様子】

グラブ式採泥器を用いて1地点で底質を3回採取し、0.5mm目のフルイでふるった後に残ったものを試料とした。試料を保存容器に入れて約10%濃度のホルマリンで固定し、分析室にて出現種の同定、個体数の計数、湿重量の測定を行った。



グラブ式採泥器



ふるい状況



底生生物試料

生物調査（干潟以外）のレポート⑥

実施・主催機関	調査場所・地点名	実施日	調査内容
横浜・八景島シーパラダイス	横浜市海の公園	8月2日	魚類

生物調査の結果

団体名	横浜・八景島シーパラダイス		
調査地点名	横浜市海の公園		
位置座標 (可能であれば)	緯度		
	経度		
実施年月日	2023年8月2日		

【実施場所】

南口に近い砂浜の中央付近沖合約100m水深約1.5m

【使用器具】

小型地曳網（使用時開口幅5m）

【実施方法】

アマモ場を目視で確認し25m×3回の曳網を実施

【採集生物】

アオタナゴ	83 mm	1匹
アサヒアナハゼ	88~99 mm	3匹
アミメハギ	23~63 mm	76匹
ウミナメクジ	29 mm	1匹
ウリタエビジャコ	29~32 mm	3匹
オクヨウジ	82~94 mm	2匹
ギマ	7~40 mm	14匹
クサフグ	23~146 mm	17匹
スジハゼ	22~65 mm	6匹
スズキ	160~168 mm	2匹
ツノモハゼ	26~37 mm	4匹
ニクハゼ	30~46 mm	308匹

ヒガンフグ	75～95 mm	4 匹
ヒメイカ	10～20 mm	11 匹
マハゼ	90～118 mm	4 匹
メバル	72～77 mm	3 匹
ヨウジウオ	40～224 mm	26 匹
サザナミフグ	24 mm	1 匹
アオサハギ	79～219 mm	5 匹
ホンベラ	21 mm	1 匹
アイゴ	22～58 mm	20 匹
アカオビシマハゼ	22～33 mm	4 匹
ヒイラギ	19 mm	1 匹

生物調査（干潟以外）のレポート⑦

実施・主催機関	調査場所・地点名	実施日	調査内容
国土交通省関東地方整備局港湾空港部	臨港パーク	8月21日	東京湾に生息する水生生物

生物調査の結果

団体名	関東地方整備局港湾空港部		
調査地点名	臨港パーク		
位置座標 (可能であれば)	緯度	35°27'43.18"	
	経度	139°38'18.17"	
実施年月日	令和5年8月21日		

【対象生物】

東京湾に生息する水生生物

【調査結果概要】

臨港パーク護岸前面では、以下の種が見られました。(表-1 生物調査（干潟以外）臨港パーク確認種一覧参照)

当日の水中透明度が悪かったため、写真が撮影できたものは少ないですが、撮影できたものを以下に掲載します。



Y.P. -4m カンザシゴカイ



Y.P. -4m イトマキヒトデ



Y. P. -4m イシガニ



Y. P. -4m イトマキヒトデ

表-1 生物調査（干潟以外）臨港パーク確認種一覧

種名等		確認環境、水深
植物	緑藻植物	シオグサ属 コンクリート護岸 Y. P. +0.5m
	紅藻植物	トゲサ属 石積 Y. P. -1.0m
動物	刺胞動物	ヒトロ虫綱 捨石 Y. P. -7m
		イギンチャク目 砂底、石積 Y. P. -1.0～-7.3m コンクリート護岸 Y. P. 0.0m～-1.0m 捨石 Y. P. -4.0m～-7.0m
		軟体動物
	レイカイ 石積 Y. P. -1.0～-2.0m	
	アカシ 石積 Y. P. -1.0m	
	サルウカイ 砂底 Y. P. -1.0m 捨石 Y. P. -4.0m	
	ミドリカイ コンクリート護岸 Y. P. +0.0～-2.0m	
	シマノウネカイ コンクリート護岸 Y. P. +0.0m	
	イホシ コンクリート護岸 Y. P. +0.5m	
	環形動物	カンザシカイ科 石積 Y. P. -1.0～-7.3m コンクリート護岸 Y. P. 0.0m～-2.0m 捨石 Y. P. -4.0m～-7.0m
		ミスヒキカイ科 砂底 Y. P. -1.0m 石積 Y. P. -2.0m～-6.0m 捨石 Y. P. -4.0m
		ミドリカイ 石積 Y. P. -1.0m～-2.0m
		節足動物
	イシガニ 石積 Y. P. -2.0m	
	ヤカ下目 石積 Y. P. -1.0m	
	苔虫動物	苔虫綱 コンクリート護岸 Y. P. -1.0m
	棘皮動物	イトマキヒトデ 石積 Y. P. -1.0m～-2.0m コンクリート護岸 Y. P. -2.0m
		脊索動物
	メジナ 石積 Y. P. -2.0m	
	クダイ 石積 Y. P. -2.0m	
	マハセ 石積 Y. P. -2.0m	
	シマハセ類 石積 Y. P. -2.0m 捨石 Y. P. -4.0m	
	キヌ 石積 Y. P. -1.0m	
マナコ 周辺遊泳		



【調査の様子】



海藻海藻類モニタリング調査



生物モニタリング調査

### 8-3 「東京湾生物情報とりまとめおせつ会」による取組

#### (1) 取組の概要

「東京湾生物情報とりまとめおせつ会」が、様々な団体に観察結果の提供を呼びかけ、14 団体が 19 地点において 2023 年に東京湾で観察した生物種のとりまとめを実施しました。

※一部 には 8-1 又は 8-2 との重複があります。

## (2) 取組のレポート

### 生物調査の結果

団体名	東京湾生物情報とりまとめおせっ会	
調査地点名	東京湾全域（追加報告として葛西臨海公園、多摩川河口、左近川含む）	
位置座標	緯度	
	経度	
実施年月日	令和5年1月～12月	

#### 【対象生物】

ベントスと魚類および一部プランクトン、藻類など全ての観察種情報

#### 【調査概要】

東京湾生物に関する調査は、東京湾再生官民連携フォーラムモニタリング PT においても企画され、参加を呼びかけている。しかしながら、生物調査とくに一般市民の参加する調査は、安全対策や指導体制、機材の準備、生物採捕許可申請や調査地への立ち入りなど、多くの事前の検討準備と手続きが求められ、フォーラムの調査応募に対して、事前の参加申請が困難な側面がある。

一方、湾岸の施設管理団体や、各所で活動する地域 NPO は、市民とともに定期的あるいは日常的に生物観察を続けており、多くの生物生息情報を蓄積している。この様な状況の中「東京湾生物情報とりまとめおせっ会」では、2022 年から東京湾の生物多様性の具体的把握のために、様々な団体に観察結果の情報提供を呼びかけ、2022 年内（1 月から 12 月）に湾各地で観察できた生物種のリスト作成を行った。

2022 年では、甲殻類や貝類など、限られた生物群と種について集中的な回答を依頼したが、今年は東京湾生物の多様性を理解するために、これまでのベントスと魚類のほかプランクトンを含むすべての生物群の情報提供をお願いした。

#### 【報告結果】

神奈川県、東京都、千葉県の 16 の海岸から計 24 の報告があり、全部で 687 種群の生物が報告できた。種群とは、種レベルまでは同定が技術的に困難、または現在の知見では種の確定ができていない生物群をさす。したがって今後同定制度が高まれば種数としてはさらに多いと予想される。また 2022 年と 2023 年の 2 年間で 799 種群を掲載できた。東京湾には多様な生物が生息していることが市民調査で示された。東京湾岸に干潟観察教育施設や市民団体の中に生物分類に詳しい専門家がいることで、東京湾に多様な生物が生息していることを示すことができた。

2023 年で多かった生物群は節足動物の 176 種群、ついで魚類の 139 種群、さらに多毛類（ゴカイ類）の 11 種群となった。報告数の最も多かった種は巻貝のアラムシロ、二枚貝のホトトギスで、21 の報告が、次いでタカノケフサイソガニ、マテガイで 20 の報告があった（付表 1～22）。

これまで湾内では小櫃川河口以外では見つかっていなかったハマガニが葛西臨海公園内の塩性湿地から、また希少種であるヒメアシハラガニが葛西海浜公園東なぎさから報告された。

一方、護岸のほとんどを覆うように生息していた外来二枚貝ムラサキガイの報告がない海岸が多くあり、他の外来二枚貝のコウロエンカワヒバリガイやミドリイガイよりも生息報告海岸が少ない結果となった。

人工的な塩性湿地では希少生物の新たな侵入が見られると同時に、湾全体では外来種の生息状況が変化していることが示され、湾内の生物相は変化を続けており、今後ともモニタリングとしての生物生息状況の追跡が必要であることが明らかとなった。また、調査団体間で調査方法や観察生物群の違いも大きく、団体や個人の交流を通じて生物の生態や同定に関する情報交換の場も必要とされる。

なお、今回の調査の呼びかけは「東京湾生物情報とりまとめおせつ会」が行なったが、実際の生物リストの作成、学術日本名ならびに学名の確認は多留聖典氏（東京港水中生物研究会）、小澤鷹弥（ふなばし三番瀬環境学習館）、工藤孝浩（海をつくる会）行い、情報の整理にあたっては海上智央氏（浦安市三番瀬環境観察館）のご協力を得た。報告を頂いた個人・団体とともに、作成にご尽力いただいた方々にお礼申し上げる。

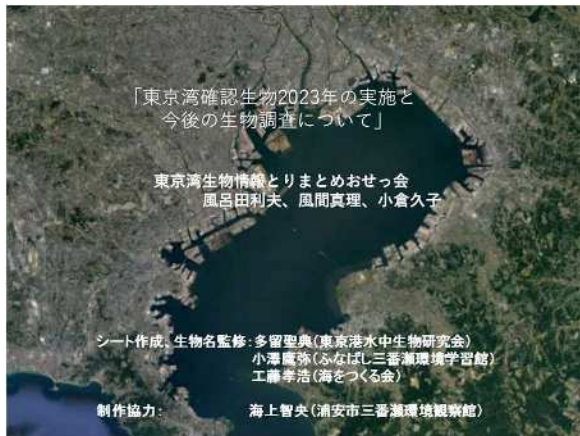


図1 調査タイトル



図2 調査地点

表1 報告された生物種群数

放散虫類	1	二枚貝類	42
繊毛虫類	1	タコ・イカ類	5
海綿類	4	多毛(ゴカイ)類	110
クラゲ・イソギンチャク類	32	コケムシ・ホウキムシ類	12
クシクラゲ類	3	節足動物(ウミグモ類・甲殻類)	176
線虫類	1	ギボシムシ類	2
ヒラムシ類	3	ヒトデ・ナマコ・ウニ類	14
ワムシ類	1	ホヤ類	10
ヒモムシ類	12	魚類	139
ヤムシ類	1	爬虫類	2
ヒザラガイ類	2	原生生物(珪藻類・海藻類)	49
巻貝類	35	アマモ類	2
ウミウシ・キセワタ類	28	全生物種群	687

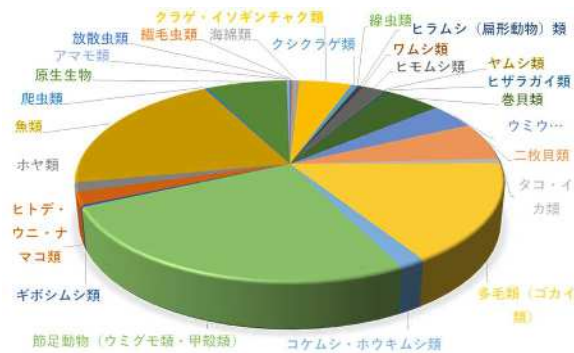


図3 報告された生物種群の割合

報告数の多かった生物(24報告中)

アラムシロ	21	マハゼ	17
ホトギス	21	コウロエンカワヒバリ	16
マガキ	20	シオフキ	15
アサリ	20	タテジマイソギンチャク	14
タカノケフサイソガニ	19	シラタエビ	14
マテガイ	18	ニホンスナモグリ	14
ユビナガスジエビ	18	ユビナガホンヤドカリ	14
ミズクラゲ	17	アカクラゲ	13
ホンビノスガイ	17	シマメノウフネガイ	13
ミズヒキゴカイ種群	17	イボニシ	13
ボラ	17	コメツキガニ	13



アラムシロ



ホトギス

図4 報告数の多かった生物

### ムラサキイガイが減少？



ムラサキイガイ 7/24



コウロエンカワヒバリガイ16/24



ミドリイガイ12/24

東京湾では最も多い外来二枚貝であった  
ムラサキイガイの出現報告が減少。

ほかの外来二枚貝類と比較(24報告中)  
ムラサキイガイ 7報告  
コウロエンカワヒバリガイ 16報告  
ミドリイガイ 12報告

図5 ムラサキイガイの変化

### 【追加報告1】 葛西臨海公園野鳥園下ノ池(感潮池) のヨシ群落内でハマガニの生息報告

大型の陸性ガニのハマガニは三浦半島の江奈湾での生息が知られていたが、東京湾内では小櫃川河口以外での出現記録はなかった。今回湾奥の葛西臨海公園でも見つけた。



### 【追加報告2】 多摩川河口ヒヌマイトトンボ観察記録

日時 2017年6月14日から 2023年8月14日まで 主に13時から14時の間

場所 多摩川六郷橋下流 六郷緑地

観察方法 目視・写真撮影 観察・資料作成 佐川麻理子、1回の観察時間 約20分から30分  
※環境として

- 川側のアシ原と六郷緑地グランド側にはさまれた細長いワンド。満潮時には水が溜まり干潮時には干出する。草丈は1m前後。アシ原ではなく全面の草周りで確認。
- 水中や周辺の干潟にクロベンケイガニやベンケイガニが混在している。倒木や流木 ゴミが多い。
- ワンドの満潮時は最大水深 約40cm 干潮時は干出する。



2020年6月26日 現地付近



確認した日

2017年	6/14	6/16	6/19	7/4	7/13	※2017年から2020年は個数は未確認				
2018年	6/12	6/22	7/2	7/9	個数未記入は未確認					
2019年	6/4	6/11	6/12	6/17	6/28	7/2	7/9	7/22	7/23	
2020年	6/15	6/23	(7月は未確認。少ないのは前年10月の台風19号の影響か)			※2021以降は個数雌雄確認				
2021年	5/24	メス	オス	未成熟		2022年	5/23	メス17	オス10	未成熟4
	5/25	メス9	オス4	未成熟4			6/7	メス8	オス6	未成熟2
	5/26	メス3	オス	未成熟			6/13	メス8	オス5	未成熟1
	6/7	メス	オス	未成熟			6/23	メス8	オス6	未成熟
	6/11	メス	オス	未成熟			7/4	メス2	オス1	未成熟
	6/15	メス	オス	未成熟			7/8	メス7	オス6	未成熟
	6/20	メス20	オス17	未成熟						
2023年	5/30	メス14	オス16	未成熟4						
	6/5	メス14	オス13	未成熟3						
	6/16	メス12	オス22	未成熟6						
	7/3	メス14	オス13	未成熟3						

干潮時の六郷干潟



2020年6月23日 六郷緑地

2022年5月23日  
六郷干潟未成熟



2019年7月2日



【追加報告3】 江戸川区左近川の水位低下で発見された水生生物

風呂田利夫(東邦大学)、高野季樹(筑波大学)、高沢剛希(茨城大学)、  
高原賢一(江戸川区青少年委員)

江戸川区の左近川は旧江戸川(水系としては江戸川本流)と荒川河口部に開口する新左近川間を東西にのびる水路である。本来は江戸川の分流であったが、現在ではコンクリートや置石で造られた川幅約5m、水深約1mの人工的な環境で、旧江戸川間の水門を通した人為的な通水により入水が管理されている。塩分は入水元の江戸川河口の水質を反映して海水の半分程度の15から17で、汽水である(橋詰ほか2016)。

2023年10月24日、報告者のひとり、高原より左近川の水位が低下し多くの魚類が露出しているとの情報を得て、江戸川水門近くの逃げ遅れた生物の緊急調査を行った。左近川の江戸川水門近傍(写真1)にて約1時間の報告者4名の目視調査により生物の生息を確認した。東京湾奥部の都市水路に多くの海生生物が侵入生息していることを示す貴重な情報として報告する(表1)。

表 1：発見された左近川の水生生物。全長は現場での目視による。

	科	和名	学名	最大全長
魚類	ウナギ科	ニホンウナギ	<i>Anguilla japonica</i>	60 cm
	ニシン科	サツパ	<i>Sardinella zunasi</i>	7 cm
	コイ科	ウグイ属	<i>Pseudaspius</i> sp.	10 cm
	コチ科	マゴチ	<i>Platycephalus</i> sp. 2	40 cm
	スズキ科	スズキ	<i>Lateolabrax japonicus</i>	40 cm
	タイ科	クロダイ	<i>Acanthopagrus schlegelii</i>	20 cm
	ニベ科	シログチ	<i>Pennahia argentata</i>	25 cm
	シマイサキ科	シマイサキ	<i>Rhyncopelates oxyrhynchus</i>	6 cm
	ハゼ科	マハゼ	<i>Acanthogobius flavimanus</i>	20 cm
	ハゼ科	ウロハゼ	<i>Glossogobius olivaceus</i>	20 cm
	ハゼ科	チチブ属	<i>Tridentiger</i> sp.	8 cm
多毛類	ゴカイ科	カワゴカイ属	<i>Hediste</i> sp.	8 cm
二枚貝類	シジミ科	ヤマトシジミ	<i>Corbicula japonica</i>	2 cm
甲殻類	テナガエビ科	テナガエビ	<i>Macrobrachium nipponense</i>	8 cm

ハゼ科魚類の一部や多毛類のカワゴカイ類を除いてほとんどの生物がすでに死亡していたが（写真 2、3）、腐敗臭はなかった。今回観察された多くの種は、海域から河口汽水域または河口域に生息するもので、ニホンウナギ（写真 4）やテナガエビは河口域からさらに河川淡水域に遡上する生物であった。特に数的に多かったのは汽水性のマハゼ（写真 5）とヤマトシジミ（写真 6）であった。マハゼは全長で 10 cm 以上、最大で 20 cm に達し、同時期の行徳野鳥保護区新浜湖で得られた 4 から 12 cm（野長瀬・風呂田 私信）で見られるより明らかに大型のものが目立った。ヤマトシジミも一部の河床が空き殻で敷きつめられ、この川での橋詰ほか（2016）の報告どおり、高密度の生息を裏づけていた。ニホンウナギは最大体長 60cm であったが、水位低下直後はより大型のものが多く、調査時にはすでに持ち去られていたと推測される。また、マゴチ（写真 7）は最大で約 40cm に達し、市場流通できるほど大型で食料資源としてもったいなさを感じた。そのたの生物の写真を写真 8 から 13 に示す。

いずれにしても、今回偶然に水位が低下ことで観察された左近川での水生生物の多様性と豊富さには驚かされた。都市の人工河川とはいえ、居住・産業空間内に入り込む水域にいかにも多くの東京湾由来の生物が侵入しているかを示すもので、江戸前水域の生物回復のポテンシャルの高さを示すものであった。また、調査時はマハゼの繁殖開始時で今回観察された全長 20cm に達する大型個体は、本来なら繁殖地である沿岸海域へと移動している時期である。40cm のマゴチも東京湾において観察されることの少ない大型サイズで、左近川に侵入したものの、成長に伴う湾への移動が妨げられている可能性が高い。いずれにしても、今後沿岸都市域での水路環境の保全の重要性と、海由来の生物の生息場再生の可能性を示すもので、さらにそれらの生物の生息を活用した生物観察や捕獲救出放流活動をとおした環境学習など生態系サービスのワイズユースを考える必要性を痛感した。



参考資料

橋詰和慶、木内秋恵、高木嘉雄 (2016) : 江戸川支流、左近川におけるヤマトシジミ (*Corbicula japonica*) の個体識別による成長について. 戸板女子短期大学研究年報, (59), 19-25.



写真1 水位が低下した左近川旧江戸川水門近傍



写真2 死亡した魚類。クロダイ、スズキ、マハゼなど。



写真3 カワゴカイ属の一種



写真4 ニホンウナギ



写真5 マハゼ



写真6 ヤマトシジミの死殻



写真7 マゴチ



写真8 ウグイ属の一種



写真9 スズキ



写真10 クロダイ



写真11 シマイサキ



写真12 チチブ属



写真13 テナガエビ

### 【レッドリスト等への掲載状況】

今回の確認生物のリストについて、事務局において、環境省レッドリスト 2020(令和2年3月)及び環境省版海洋生物レッドリスト(平成29年3月)への掲載の有無を調べたところ、絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN)と評価される種が2種、絶滅危惧ⅠB類(EN)と評価される種が3種、絶滅危惧Ⅱ類(VU)と評価される種が10種、準絶滅危惧(NT)と評価される種が35種含まれていることが確認できました。また、生態系被害防止外来種リスト(環境省及び農林水産省、2016)への掲載の有無について調べたところ、特定外来生物は2種、総合対策外来種が14種含まれていることがわかりました。

#### 【レッドリストへの掲載状況】絶滅危惧Ⅰ類(CR+EN) 2種

オウギウロコガイ、アサクサノリ

#### 絶滅危惧ⅠB類(EN) 3種

ツバサゴカイ、バンズマメガニ、ニホンウナギ

#### 絶滅危惧Ⅱ類(VU) 10種

カワアイ、カハタレカワザンショウ、イリエゴウナ、カミスジカイコガイダマシ  
ヤミヨキセワタ、ヒメマスオ、ウモレベンケイガニ、エドハゼ、チクゼンハゼ、マサゴハゼ

#### 準絶滅危惧(NT) 35種

ツボミ、イボキサゴ、ウミニナ、フトヘナタリ、クリイロカワザンショウ  
ヨシダカワザンショウ、ヒナタムシヤドリカワザンショウガイ、エドガワミズゴマツボ  
クレハガイ、ムシログイ、ムラクモキジビキガイ、ウスコミミガイ、コケガラス  
サビンラトリ、サクラガイ、ウズザクラ、ウネナシトマヤ、ヤマトシジミ、オオノガイ  
スジホシムシ、スジホシムシモドキ、イトメ、アナジャコフクロムシ、クボミテッポウエビ  
ヨモギホンヤドカリ、ベンケイガニ、クシテガニ、ハマガニ、ヒメアシハラガニ、オサガニ  
アカホシマメガニ、ミサキギボシムシ、ドジョウ、ヒモハゼ、トビハゼ

#### 情報不足(DD) 7種

ヒガタヨコイトカケギリ、ガタツキ、テナガツノヤドカリ、ツバクロエイ、トビエイ  
オニボラ、スッポン

#### 【生態系被害防止外来種リストへの掲載状況】

##### 特定外来生物 2種

アメリカザリガニ、カダヤシ

##### 総合対策外来種 14種

サキグロタマツメタ、シマメノウフネガイ、ムラサキイガイ、ミドリイガイ  
コウロエンカワヒバリガイ、ホンビノスガイシナハマグリ、タイワンシジミ、イガイダマシ  
カニヤドリカンザシ、タテジマフジツボアメリカフジツボ、ヨーロッパフジツボ  
チチュウカイミドリガニ